

米沢市埋蔵文化財報告書 第51集

K-547

直江石堤

発掘調査報告書 第Ⅱ集

1995

米沢市教育委員会

直江石堤

発掘調査報告書 第Ⅱ集

1995

米沢市教育委員会



直江石堤指定区域（北上空から）



直江石堤指定区域（南上空から）

本文目次

序文

例言

I 史跡の概要.....	1
II 調査の経過.....	3
III 調査の概要.....	5
1) トレンチ調査.....	6
2) 拡張区の調査.....	15
3) 石堤の復元.....	15
IV 調査の結果.....	17
V 要約.....	17

挿図目次

第1図 直江石堤位置図.....	2
第2図 石堤調査箇所・旧石堤想定図 ..	4
第3図 A・E・Fトレンチ土層断面図 ..	7
第4図 Bトレンチ土層断面図	8
第5図 Bトレンチ北側石積面図	9
第6図 C・Dトレンチ土層断面図	11
第7図 H・I・Jトレンチ土層断面図 ..	12
第8図 Hトレンチ北側石積平面図 ..	13
第9図 G・Kトレンチ土層断面図	14
第10図 谷地河原御手伝傳川除絵図 ..	16
第11図 直江石提概念図.....	18

図版目次

卷頭図版 指定箇所近景	
図版一 A・Cトレンチ土層断面	
図版二 Bトレンチ土層断面	
図版三 G・Fトレンチ土層断面	
図版四 Hトレンチ土層断面	
図版五 B・Hトレンチ	
図版六 Hトレンチ北側拡張区	
図版七 Hトレンチ北側拡張区	
図版八 J・Iトレンチ土層断面	
図版九 各調査前風景・現地説明会風景・調査風景	
図版十 C・Hトレンチ付近調査前状況	

序 文

本報告書は、米沢市教育委員会が平成6年度に実施した直江石堤発掘調査の成果をまとめたものです。

本石堤の調査は、平成4年度に実施した測量調査に続く第2次調査にあたります。

直江石堤の正式名称は谷地河原堤防ですが、直江兼続が築堤したことから、地元では直江石堤の愛称で呼ばれ、広く市民に周知されております。

本堤防は、米沢の城下町構想の一貫として治水事業を施工した、東北でも例をみない護岸遺構であり、当時の土木技術を知る上で注目されている所であります。

本市教育委員会では、直江石堤の歴史的重要性を鑑み、後世に伝えることと保存の目的から、石積の分布する範囲の1.3kmを、昭和61年に市指定史跡として保存整備にあたってまいりました。

今回の調査は、最上川の護岸工事及び市道新設工事に伴うもので、その開発対象地区的石堤にトレンチを入れ、その石積形態や版築状況等を把握する目的で調査を実施したものです。今回の調査よって、石積の構築状況や構造の様子が判明いたしました。

最後になりましたが、調査にあたって数多くのご指導、ご協力を賜りました文化庁、山形県教育庁文化財課をはじめ、山形県米沢建設事務所河川砂防課、地権者各位、地元の皆様に対し、衷心よりお礼申し上げます。

平成7年3月

米沢市教育委員会
教育長 相田 實

例　　言

- 1 本報告書は、米沢市教育委員会が平成6年度に緊急発掘調査を実施した、直江石堤の発掘調査報告書である。
- 2 調査は米沢市教育委員会が実施したものである。
- 3 調査体制は下記の通りである。

調査主体 米沢市教育委員会

調査総括 舟山豊弘

調査担当 手塚 孝

調査主任 月山隆弘

調査参加者 石井よそ子・井上吉栄・菊地芳子・黒沢栄美子・
黒沢富雄・佐藤則弘・高橋 実・中島国雄・前山慶一・
柳町昌孝

4 事務局 我妻淳一・須佐勝也・平間洋子

5 調査指導 文化庁・山形県文化財課

6 調査協力 米沢建設事務所河川砂防課・ホーセン興業(株)・中村工務所(株)

凡　　例

- 1 挿図の縮尺は、各図面にスケール等で示した。
- 2 本書の作成は、月山隆弘が担当し、手塚 孝が総括した。

I. 史跡の概要

直江石堤「谷地河原堤防」は米沢藩の治水政策として、上杉景勝の重臣、直江山城守兼続によって築堤されたといわれる。直江兼続は、上杉謙信、上杉景勝と仕えた武将で、文武両面に優れ、ことのほか信頼が厚く慶長3年（1598）には、大大名クラスともいえる米沢30万石の加増を上杉景勝より拝領している。上杉景勝は慶長5年（1600）の関ヶ原の戦いで、石田三成率いる西軍に与したことより、翌6年8月に会津120万石から米沢30万石に削封された。直江は自らの領地を主君景勝に明け渡すとともに、米沢藩上杉氏の本城として、城下町の整備構想として本格的に着手した。直江は米沢城の拡張、町割、下臣団の屋敷割、開拓とその手腕を發揮するが、治水事業にも積極的に取組み、直江石堤を始め猿尾堰、帶刀堰、穴堰等困難工事を普請している。特に直江石堤は、城下に侵入する洪水を防ぐ重要な役割を示していた。石堤は、松川河川の流路にそって河原石と砂利を用いて構築した全長3kmにも及ぶ堤防で、全国的にも数少ない江戸時代初期を代表する護岸遺構である。

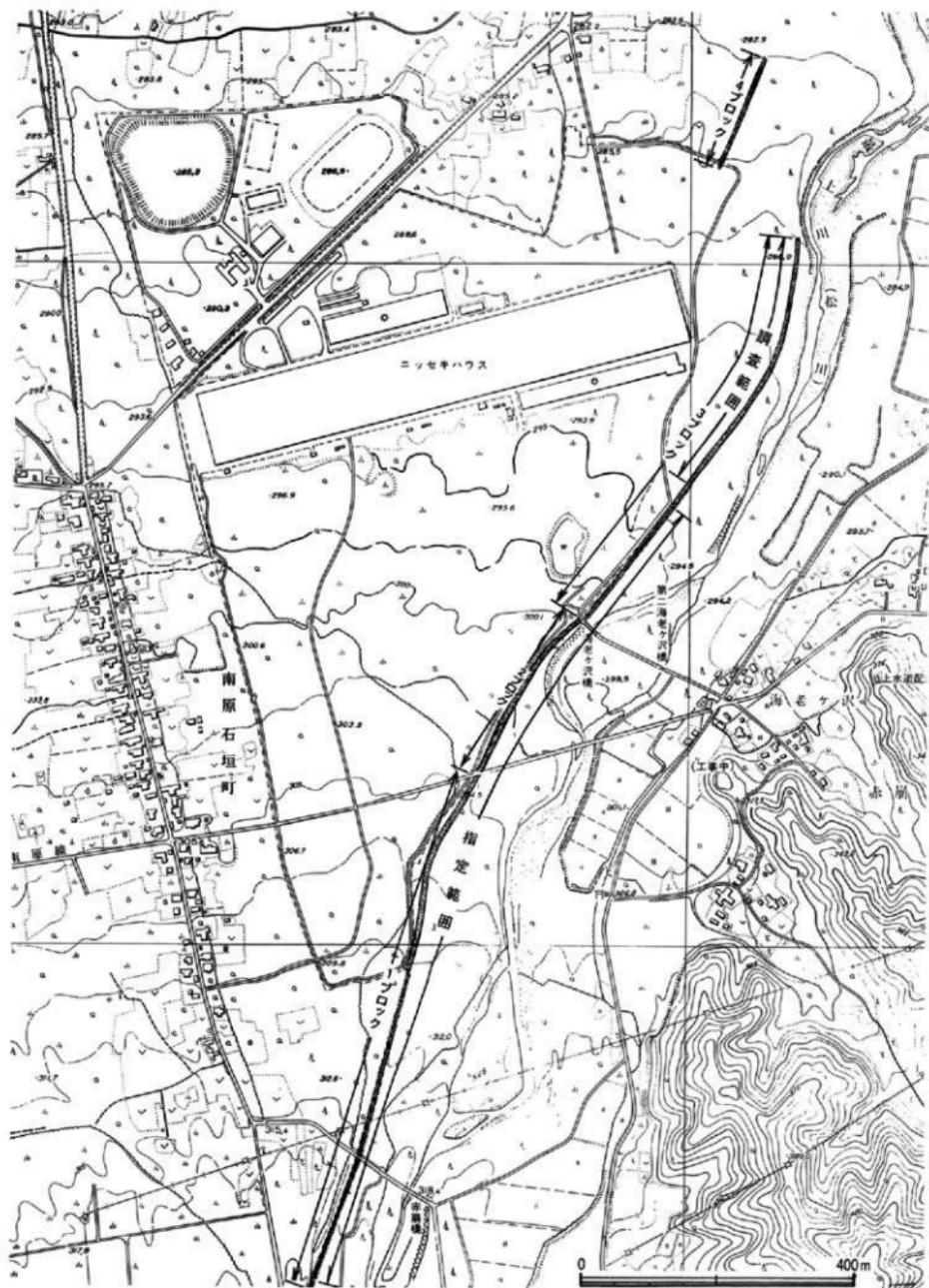
石堤の形状は、河川の流れや氾濫の危険箇所に応じ、石堤の工法や形態を駆使して無段から二段、時には三段と構築している。

上杉藩の記録によれば、寛永8年（1631）、寛永17年（1640）、寛政10年（1798）、文化9年（1812）、文政8年（1825）、同12年（1829）に藩士お手伝いよって石堤の普請が行われている。特に、寛政10年の『東河原川御手伝御絵図』と文化9年の『谷地河原御手伝川除絵図』には、石堤の修復した普請の状況や労働割当、普請の範囲が詳しく記載されている。

これらの資料から推測すると堤防は、現在の赤崩橋付近から下花沢地内まで及んでいたことが想定される。

ただし、寛政10年の東河原川の堤防は、松川の右岸に沿って築かれた現在の新大橋付近から下花沢地内にかけてのものであり、文化9年の『谷地河原御手伝川除絵図』に示されている松川左岸堤防とは区別しなければならないものであり、所謂「直江石堤」は文化9年の『谷地河原御手伝川除絵図』に示された範囲を指すものである。

今回の調査対象となる堤防は、いうまでもなく後者の谷地河原堤防にあたるものである。この石堤は、昭和50年度の河川改修工事の計画に伴い、全国的に注目される江戸初期の護岸遺構としての歴史的な重要性を考慮し、昭和61年に



第1図 直江石堤位置図

約1.3kmの範囲（現赤崩橋付近から下流1.3kmの区域）を市の文化財史跡に指定し、今まで整備保存してきた。

一方、石堤の範囲と石堤の形態、依存状況を把握する目的で、平成4年度に実施した分布調査では、指定範囲の上流の大字李山付近と下流と芳泉町付近にかけ、新たに3箇所の石堤が確認されている。

前者の李山地内の石堤は、現在の「龍師火帝」の碑から下流にかけて、8m～10mの幅で部分的にではあるが、約270mの範囲に石積が剥落した状況で存在するものであり、中心に巨大な河原石が点在していることから、かつて石堤であったことを示唆するものである。

後者の石堤は、指定範囲の下流に隣接するもので、河川の既工事によって大半が失われているが、約530mに部分的に当時の痕跡を留めている。注目されるのは、石堤の末端部分を確認できたことであり、所謂「直江石堤」の終点を意味しているものと考えられる。さらに、下流から西側に離れた箇所に5m幅で約130mの範囲にも地元で蛇堤と呼ばれる石堤が確認されている。

II. 調査の経過

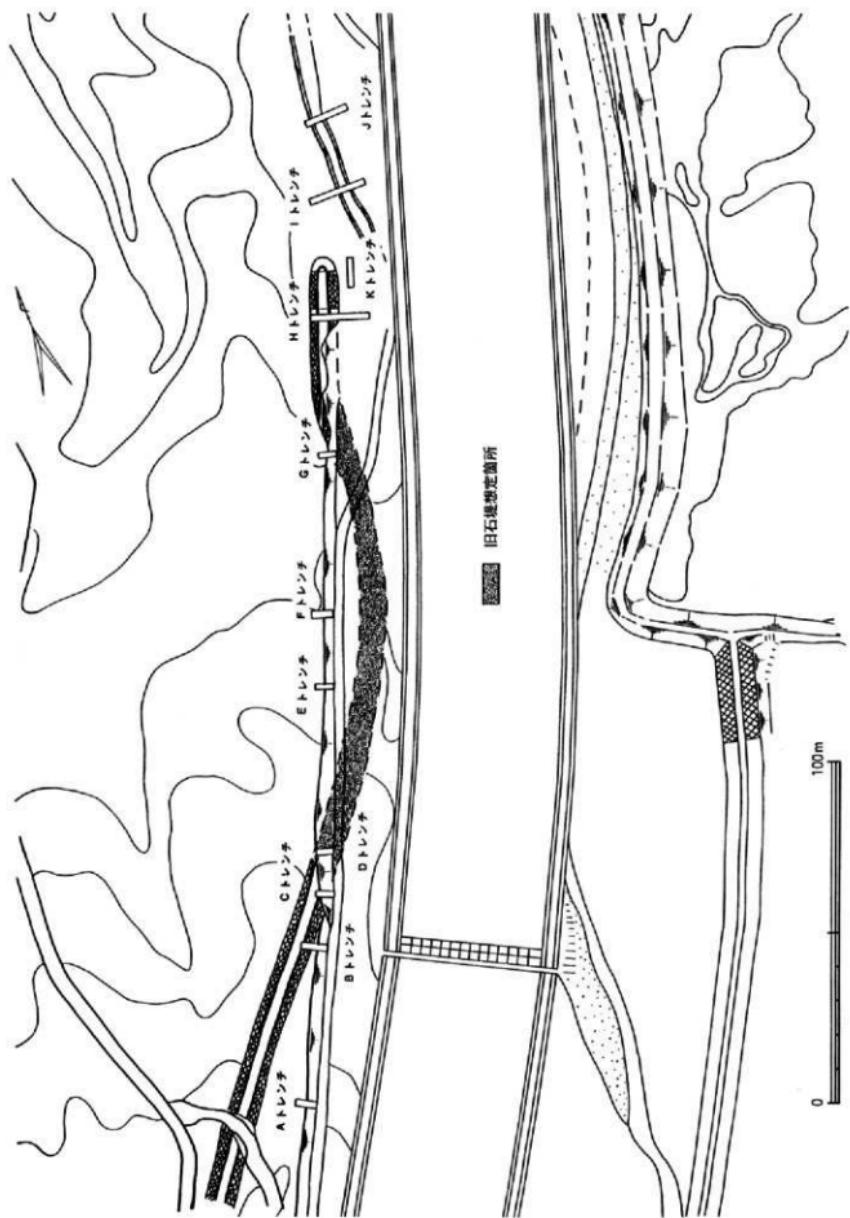
今回の調査の対象となった範囲は約400mで、平成4年の分布調査で確認された石堤部分であり、指定箇所に隣接した下流域にあたる。この部分は石堤の指定範囲に加わっていないこともあって、昭和61年に堰堤工事、同じく仮設道路等の工事によって既に石堤が部分的に破壊されている。

しかし、石堤として確認される箇所も残存していることから直江石堤の範囲を知る上では注目されるものである。

一方、この範囲に関しては、河川改修工事が計画的に進められてきたところでもあり、加えて河川敷に隣接する市道新設工事も並行して計画されており、工事によって全面的に削平されることから米沢市教育委員会は、その施工計画を受けて文化庁・県文化財課と協議をしたところ記録保存を前提に調査を実施するようにとの指導があった。

本市教育委員会は米沢建設事務所河川砂防課・本市土木課と協議の上、工事範囲に係る約400mのうち、石堤が存在すると推測される約360mを対象に河川改修工事及び市道新設工事に伴う緊急調査として実施したものである。

調査は、現存する石堤及び既に破壊されたと推測される石堤の範囲を含めた



第2図 石提調査箇所・旧石堤想定図

全長360m、約4,000m²を対象に実施したもので、時間的な制限を考慮し、石堤の測量作業は、航空測量を委託することにした。

現場の調査は、平成6年9月6日から着手する。作業は、石堤全体を覆う雑木や草の除去から開始、並行して写真撮影と航空測量で影響のある保安林の伐採を先行して進める。

次いで、表土の剥離、面整理を10月3日から行い、全面の精査が完了した10月24日からは石堤の空中測量を開始する。

測量終了後の11月8日からは、石堤の状況と版築状況を確認するためのトレーニングを2m幅を基本として、上流よりA～Kの11本を配し、重機で掘り下げを進め、並行して石組の状況を把握するための調査区をBトレーニングとHトレーニングの北側に設定した。11月11日からは、各トレーニングの断面図の作成、11月21日からは、石積の状況が確認されたトレーニング内の石積の平面図作成作業を進め、11月30日ではほぼ終了した。

III. 調査の概要

今回の調査は、石堤の形態把握と石積の状況、石堤内部の版築状況を把握することに主眼を置いた。調査範囲の区域は、河川道路の設置や堰堤工事によって著しく破壊を受けていることから状況に応じ、トレーニングを設定することにした。トレーニングは、指定範囲に隣接している南側より設定し、Aトレーニング～Kトレーニングとし、重機で慎重に掘り下げ必要に応じ手掘りで進めた。さらに、石堤の明瞭に残るBトレーニングとHトレーニングの範囲に石積状況を確認するために調査区を2箇所設定した。調査区は、Bトレーニングの北側に2m×6mの南拡張区、Hトレーニングの北側に10m×11mの北拡張区とし、それぞれの整地層を除去し、石積の確認を行った。

今回の発掘調査で石堤の痕跡が認められたトレーニングは、B・C・D・G・Hの5トレーニングと南調査区及び北調査区であり、A・E・F・I・J・Kの6トレーニングはすべて自然堆積状況を示していた。このことは、後者のトレーニング内には石堤が存在しないことを意味している。

ここでは、各トレーニングの調査状況について事実関係を簡単に触れ、今回の調査の概要について考えてみる。

1) トレンチ調査

◎A トレンチ『第3図』

調査区の最南端に設置したトレンチであり、 $2\text{m} \times 7\text{m}$ を配し、河川道路で移動した土砂を撤去し、掘り下げたが地山は砂利層及び礫層で、河川による自然堆積を示す他は、石堤の痕跡は認められなかった。

◎B トレンチ『第5図』

A トレンチから北に50mに $2\text{m} \times 6\text{m}$ を設定した。石堤構築前の旧表土（暗黄茶褐色シルト層）に約60cmの厚さで円礫を中心に積み上げ、さらに上部にシルト層と砂利層で30cm～40cmの土盛を行っている。河川側に関しては約1m程削り出して整形していることが確認された。盛土は、2枚で、盛土1は砂利層を主体としているが、盛土2は側面に30cm～40cm前後の円礫を用いている。

◎C トレンチ『第6図』

石堤が破壊を受けているB トレンチの北側15mに $2\text{m} \times 8\text{m}$ を設定した。石堤は、河川側のシルト層を削り出して斜面を作り、石堤の基底となる暗黄茶褐色の旧表土を削平し、後に円礫器を多量に含む砂利層を交互に120cmの厚さに盛土している。

基本的な盛土は6枚で、石堤の河川側に大きめの円礫と砂利層を側面に沿って第6層を積み、その上部に盛土6層～盛土1層を交互に版築している。表面を調整する整地層及び盛土1層の上部に石積がほとんど認められないことから後世の工事で削平されたものと考えられる。

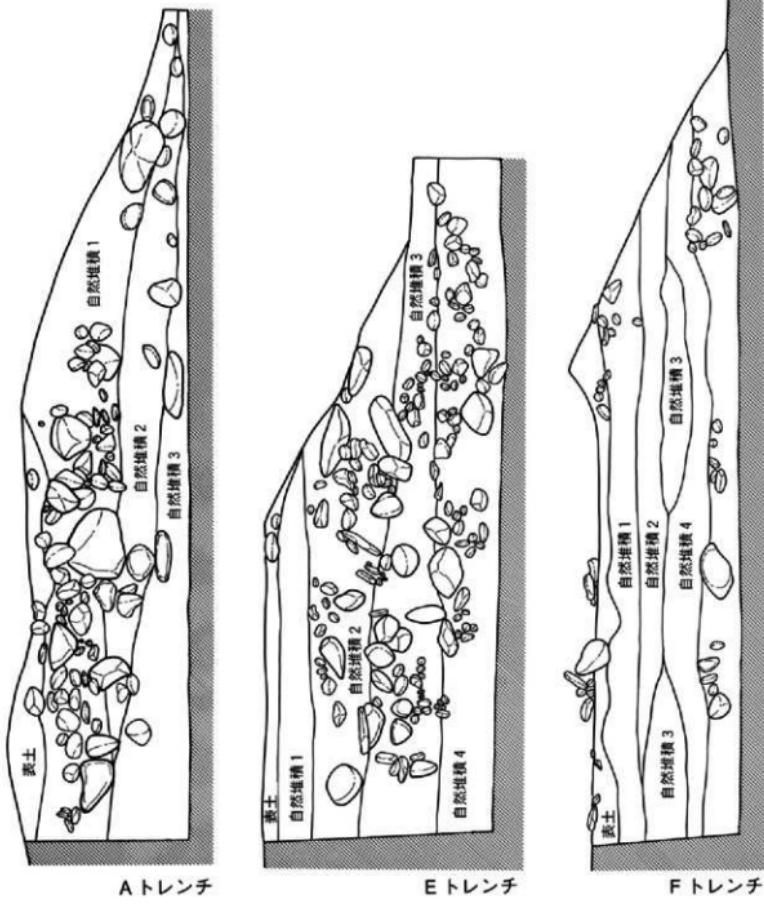
◎D トレンチ『第6図』

C トレンチの北側約13mに $2\text{m} \times 6\text{m}$ のD トレンチを設定した。盛土の大半は後世の河川道路工事によって削平されたものと考えられ、約50cm程認められたにすぎない。盛土の境界となる旧表土は河川側に行くに従って、薄くなり意図的に削平したことが判る。

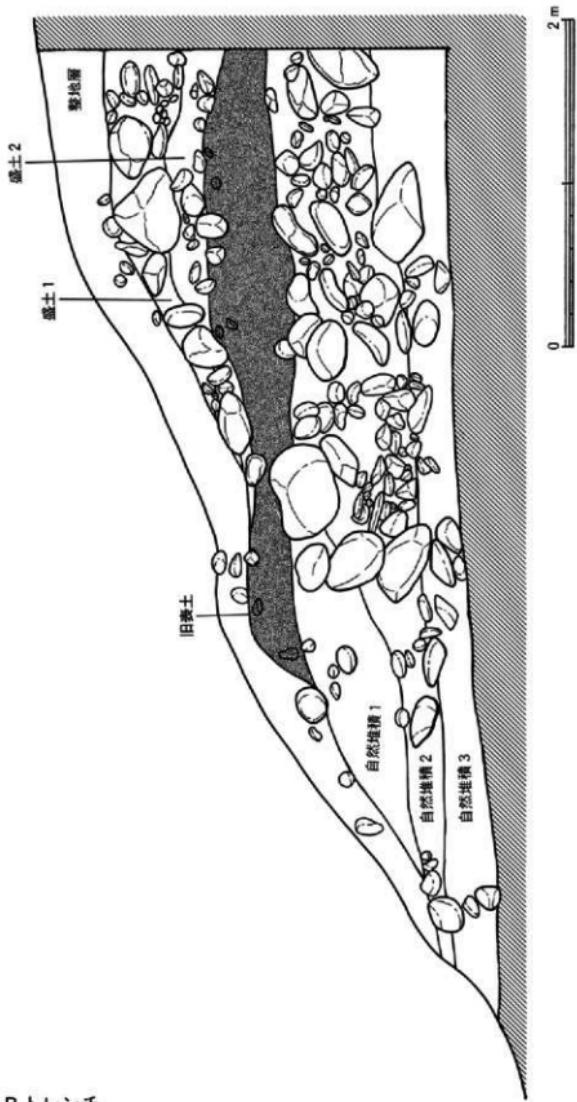
また、石堤の西側面に約80cmの巨石を設置し、石堤の基底を設置しているのが検出されている。確認された盛土は2枚で、盛土2は河原礫と砂利層を主体に盛土1は砂利層に砂を含んでいる。

◎E トレンチ『第3図』

D トレンチの北側に15m程離れた箇所に $2\text{m} \times 6\text{m}$ を設置した。第3図に示すように表土を含め、自然堆積1～自然堆積4を平行に自然の礫層が堆積しており、石堤の痕跡は認められないことから、この箇所には石堤は存在しなかつ

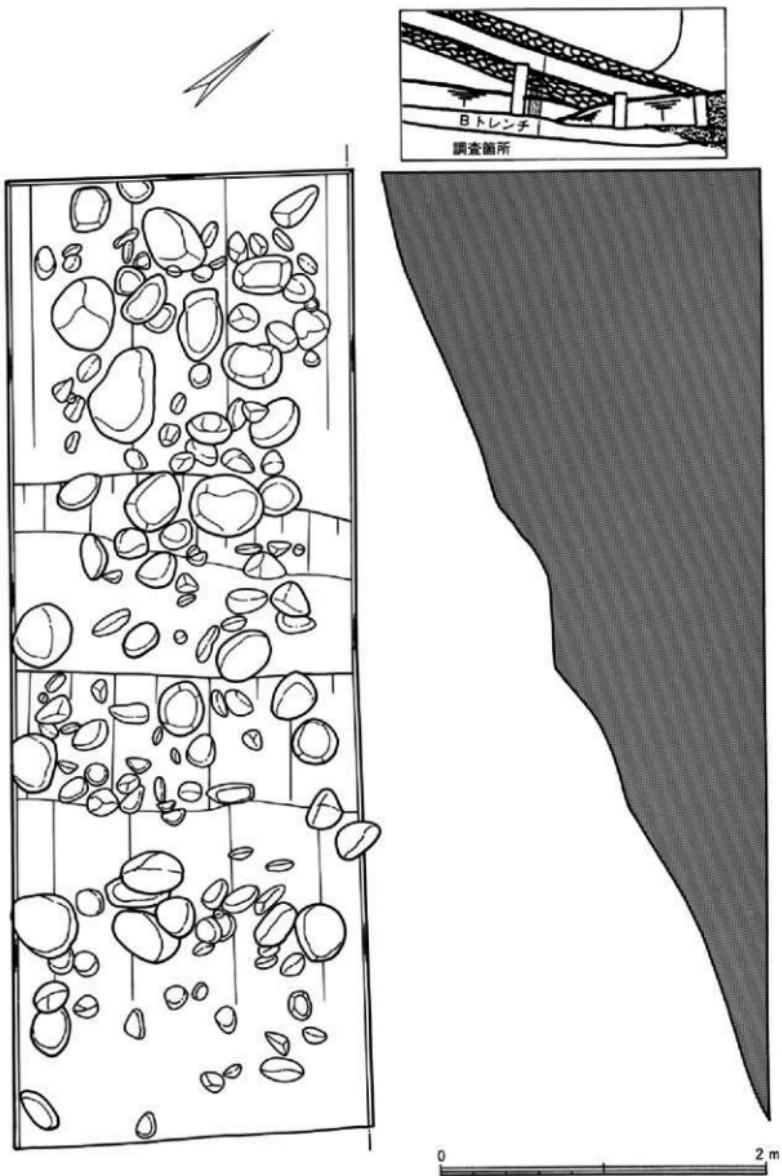


第3図 A・E・F トレンチ土層断面図



B ブレンチ

第4図 B ブレンチ土層断面図



第5図 Bトレンチ北側石積平面図

たものと推測される。

◎Fトレンチ『第3図』

Eトレンチから北の20mに2m×7mを設置した。Eトレンチと同様にシルト層及び砂層を主体にした自然堆積層であり、石堤の痕跡は認められなかった。

◎Gトレンチ『第9図』

Fトレンチの北側45mに2m×5mを設置した。河川に面した側は堰堤工事によって削平されているが、西側の盛り土は約80cm程確認された。一部、工事の際の残土が堆積している。旧表土は約40cm前後認められることから、削平はほとんどないものとみられる。確認された盛土は4枚で、Cトレンチでみられたように石堤の側面となる部分に盛土4と盛土3で小規模な土壘状の高まりを配しているのが特徴であり、その上部に盛土1～盛土2を版築している。

◎Hトレンチ『第7図』

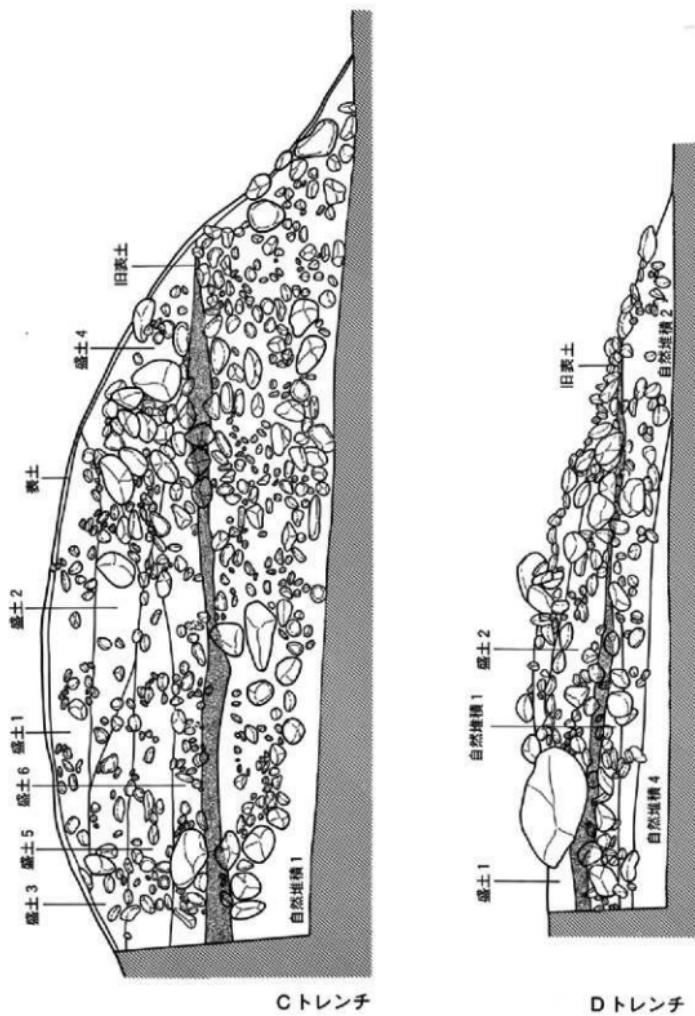
今回のトレンチでは最も良好に石堤が残存しているものであり、Gトレンチの北側40mに2m×18mを設置した。旧表土を削平し、凸状の基礎を構築してから上部に、礫層とシルト層、それに砂利層を河川の反対側、西側部分から30cm～80cmの厚さで順次積み上げて土壘状に成形してから表面に河原石を丹念に貼り付けて版築している。

基本となる盛り土は8枚で、基底部の側面には盛土8で小規模な土壘状に配して基底となる地盤を固定し、盛土7で全体を整地している。さらに盛土6、盛土9と盛土4を交互に加え、斜状に盛土5、盛土3、盛土2、盛土1の順で版築している。その後、盛土を充填する目的でシルト層と砂利層の混合層を全体に覆い、礫を密に積上げて築堤している。礫は、人頭大から40cm～50cmを主体に選別し、隙間に小円礫を埋め込んでおり、その後、シルトを主体とした砂利層との混合層で全面を覆い整地しているのが特徴である。

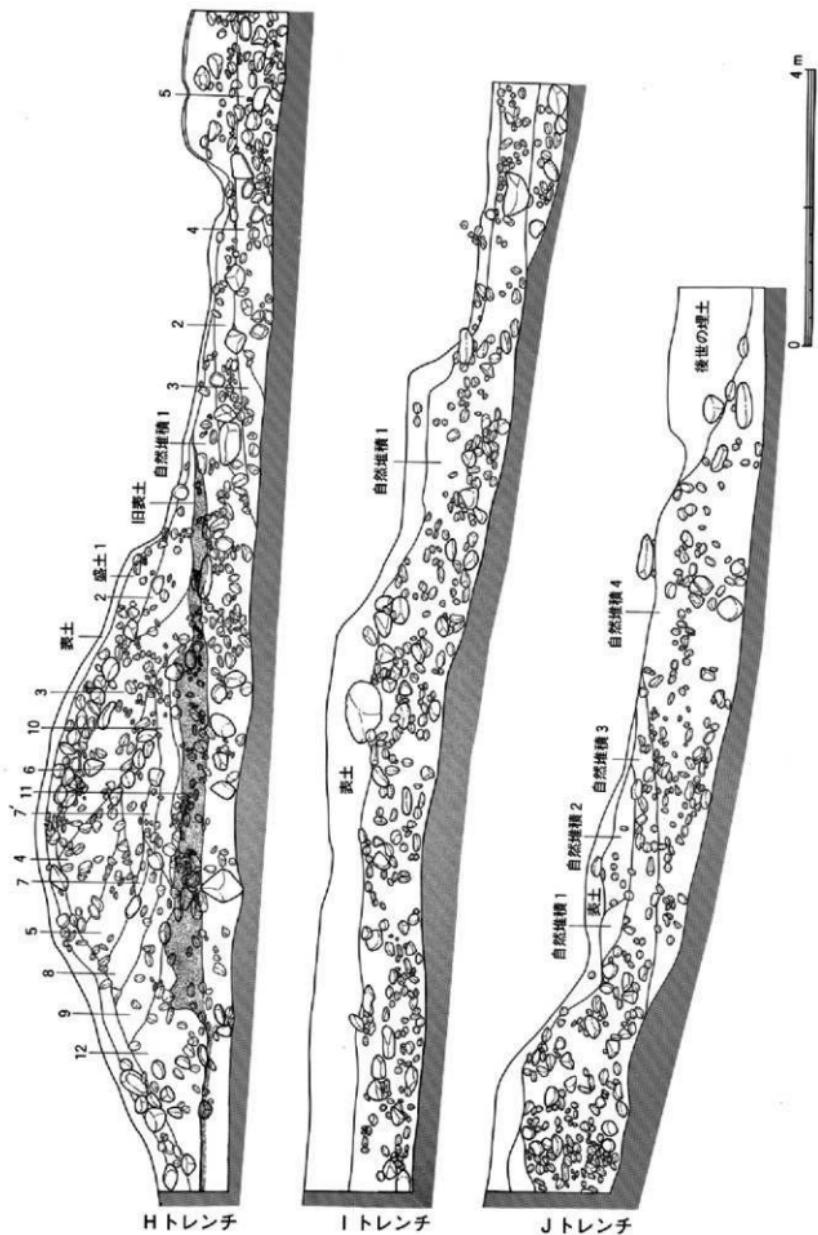
ただし、整地層に関しては、従来の石堤であったものが崩壊したことから後世になって、小円礫と整地層で修復した可能性も考えられる。隣接した調査区の状況も同様で、石堤の袖部（石堤下場）に大きめの礫を配し、上部にかけて斜め横方向に石積していることが判る。全体的にはこれまでに分類しているBタイプに近いものではあるが、さらに小円礫を配し、最後に整地していることから後世の修復と推測するのが妥当であろう。

◎Iトレンチ『第7図』

不自然な礫群が階段状に認められることからHトレンチの北側35mに2m×



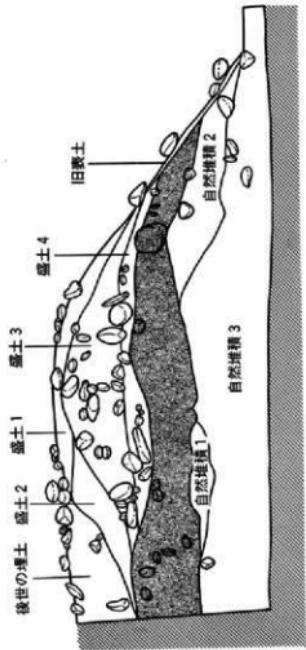
第6図 C・D トレンチ土層断面図



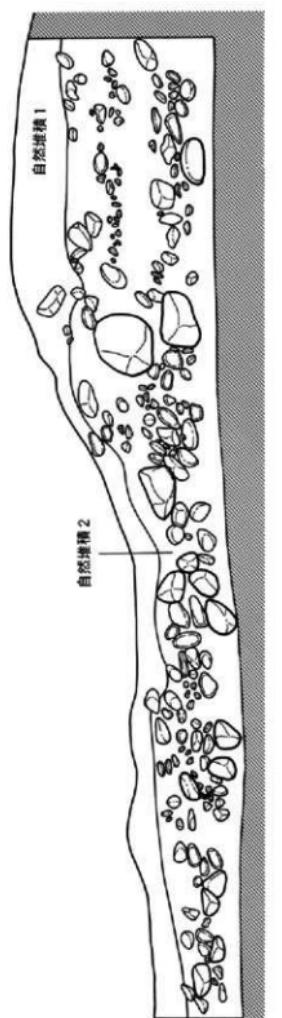
第7図 H・I・Jトレニチ土層断面図



第8図 Hトレント北側石積平面図



G トレンチ



K トレンチ

第9図 G・Kトレンチ土層断面図

16mのIトレーニチと2m×13mのJトレーニチを設置した。その結果、これらの階段状の形成は松川によって形成された小規模な河岸段丘で、自然堆積状況を示していた。石堤の痕跡は認められず、段丘下面の集石は最近のものと判明している。

◎Jトレーニチ『第7図』

Iトレーニチと同様で、自然堆積状況を示す。

◎Kトレーニチ『第9図』

自然の高まりと石堤の広がりを確認するために設置したトレーニチで、自然堆積を示していた。河岸段丘の一部と考えられる。

2) 拡張区の調査

拡張区は整地層を除去して石積の状況を確認するために設置したもので、南調査区からは2段構築を有する痕跡が確認された。石積は、欠落したものと考えられ、明確な石積としては認められなかつたが、30cm～50cmを中心に部分的に検出されている。

北拡張部は、石堤の基底部付近や平坦面に50cm～80cmのやや大きめの河原礫を配置して固定し、周囲に20cm～30cm前後の河原石を斜横に組み合わせて構成している。礫の多くは、欠落したり移動しているので明確にいえないが、これまでの石積の分類に当てはめれば、B形態に分類される。

また、部分的に礫が欠落した箇所に対し、小礫が多量に認められることから周期的に修復したものと考えられる。石積を覆う整地層は、石堤の平坦部で10cm、側面で20cm～30cmとなっている。

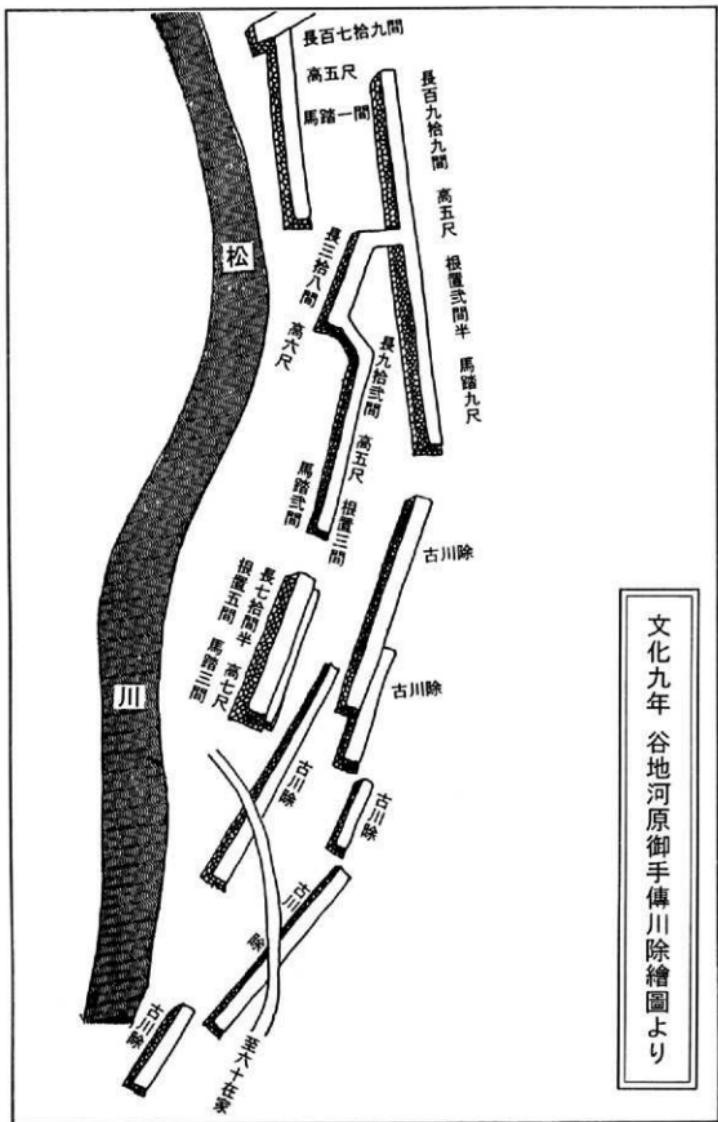
調査での計測値は、石積の確認した下場（基底部）で約9m（5間）、上場の平坦面で約3m（1.5間）、高さ1.9m（1間）を測ることで、今回の調査区に存在した石堤の基本的な数値をほぼ指すものと理解される。

さらに石堤は、Hトレーニチから北に15mで終了しており、所謂『直江石堤』が直線状に修復された石堤での末端となるものである。

3) 石堤の復元

今回調査対象となった約400mの調査から石堤の確認された範囲は、南のBトレーニチからDトレーニチと北側のGトレーニチとHトレーニチの5箇所であり、他のトレーニチ内には認められなかつた。しかも、確認された石堤の状況から推測

文化九年 谷地河原御手傳川除繪圖より



第10図 谷地河原御手伝川除絵図より作図 (文化9年)
下平才次 1976 「米沢の城下町と武家屋敷」(米沢風土記)

すれば、Hトレンチから直線的に伸びた石堤が、Gトレンチ付近にかけて河川側に曲することと、指定範囲から続く石堤がトレンチBからDトレンチの範囲にかけて斜めに河川側に移行していることを考慮すれば、第2図のように配されていたものと推測される。

また、今回の調査で石堤の末端部を確認したことにより修復した石堤の直線距離は1.55kmとなり、先の大字李山に位置する龍師火帝まで含めれば約3kmの石堤が存在したことになる。

4. 調査の結果

今回の調査で判明した結果について述べてみる。石堤は、Hトレンチと北拡張区の状況から幅5間、高さ1間、上部の平坦部で1.5間の無断構築の石堤と判明した。しかも、石堤の版築状況から石積の内部構造は、砂利層や円碟を1m前後両側に小規模な土壘状に配して盛土、その後斜状から横に移行しながら版築を施すものであり、最終的に整地層をもって碟層を中心に向かうように配列するものである。昭和61年に指定している範囲の中にも石堤の上部に整地を施した修復箇所が第1ブロックと第2ブロックの一部にみられることからこうした手法で版築しているものと予想される。

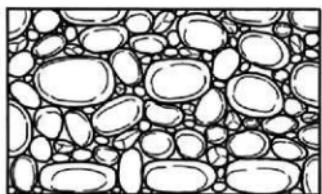
整地層は、砂利とシルトの混合層で石積全体を覆うものであり、上杉藩の記録に残る寛政10年(1798)『東河原川御手伝御絵図』、文化9年(1812)の『谷地河原御手伝川除絵図』等の修復に符合するものとみられる。

すなわち、寛政10年の東河原川御手伝御絵図に示されている堤防の築堤手法は、現存する堤の状況からの検討で、土砂によることが判明しており、第1ブロックと第2ブロックにも共通している。

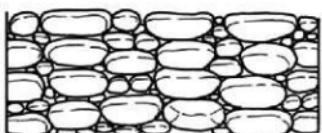
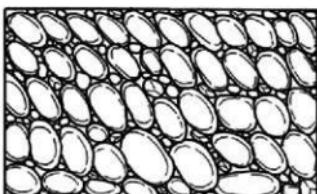
ただし、文化9年(1812)の『谷地河原御手伝川除絵図』に関しては石堤であることも事実であり、第1、第2ブロックと今回の調査範囲に関しては、文化9年以降の修復の可能性も指摘される。

5. 要 約

今回の発掘調査は、直江石堤の発掘調査としては、初めてのものであり、石堤の構築状況を知る上で貴重な資料となるものである。谷地河原堤防『直江石



平面

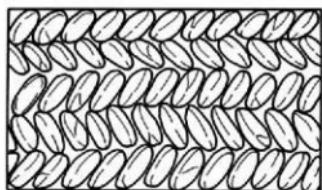


断面

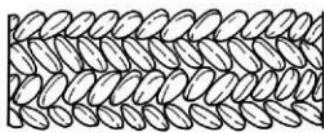
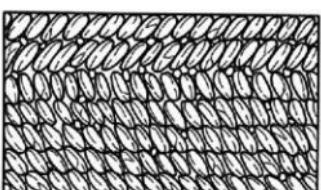
Aタイプ



Bタイプ



平面



断面

Cタイプ



Dタイプ

第11図 直江石堤概念図

堤』は、今回の調査によって末端部が確認されたことは注目され、指定範囲も合わせると約1.56kmを有していたことが判る。ただし、上流流域の先端部に関しては明確にできない。

さらに、第10図の文化9年の絵図によれば、石堤は一条の堤防ではなく、交互に新旧の石堤が入り組んだ複雑な構造であったことは明白であり、古川除と記載されている石堤は、修復の対象外である。

従って、複合した石堤が現在のような堤防になったのは文化9年以降の修復による公算が強く、その点の吟味は前述で指摘したとおり困難であるが、今後の大きな課題となるものである。

平成4年の調査では、石積の形態が第11図に示すようにAタイプ～Dタイプの4形態に分類することが可能であった。Aタイプは巨大な河原石を横に築石しているのが特徴で、Bが斜め、Cが交互、Dが側面を斜めに配した石積法で時代的な特徴と理解される。しかも、A～Dに従って礫の大きさが小規模となり、A→B→C→Dの順で新しくなるものと推測される。

年代に関しては明確にできないが、大胆に予測すると、Aは初期の築堤もしくはその影響を残すものと推測して江戸時代の前半、Bが江戸時代の後半頃、Cは江戸時代末期から明治、Dのタイプに関しては現代つまり、最近の可能性も指摘される。さらにCのタイプの石積も最近まで使用されている技法であり、現代の石積の可能性もあり、慎重に検討する必要があろう。

さらに、今回の調査で確認した石積を土砂で覆って修復する手法は、後世のある時期に確立した修復抜法と推測され、指定範囲の堤防の中においても修復の痕跡を所々に確認することができる。

今回の調査で検出された石積はBタイプに近い特徴がある。だが、整地層や小礫層の状況を考慮すれば、近世期の普請の可能性が最も高いものと指摘される。このようなことからあえて可能性を示唆すれば、初期の石堤が河川の氾濫と河川の流進の移動などから修復や補修、新たな設置を繰り返し、現在の石堤に変化したものといえる。

よって、時代的な変遷は明確にできないまでも、現在に残る所謂「直江石堤」の大半は、近世に修復された形態であるものと結論づけざるを得ない。しかしながら直江兼続の意志は、伝統的に引継がれ、米沢藩を守るべく河川の氾濫に対し、官民一体となって取り組んだ治水政策の変容と経緯を示す貴重な遺構であることはいうまでもない。

報告書抄録

ふりがな	なおえせきていはくつちょうさほうこくしょだいⅡしゅう
書名	直江石堤発掘調査報告書 第Ⅱ集
副書名	
卷次	
シリーズ名	米沢市埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第51集
編集著者	月山隆弘
編集機関	米沢市教育委員会
所在地	〒992 米沢市金池三丁目1番55号 TEL0238-22-5111
発行月日	西暦1995年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東緯	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
		市町村	遺跡番号					
ながとせきつい 直江石堤	やまがたけんよね 山形県米 ざわし 沢市赤 あかく 崩字 くずれ 谷地 いぢ 河原 かわら 宅他	6202		37度 51分 18秒	140度 7分 25秒	19940906 19941130	4,000	河川改修 事業・市 道新設事 業

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
直江石堤防	堤防	江戸時代	石堤		石堤の形態と石積状況及び、石堤内部の版築状況が判明

写 真 図 版



▲A トレンチ土層断面（東から）



▲C トレンチ土層断面（東から）



▲B トレンチ土層断面（東から）



▲B トレンチ土層断面（西から）



▲G トレンチ土層断面（東から）



▲F トレンチ土層断面（東から）

図版四



▲H トレンチ土層断面（東から）



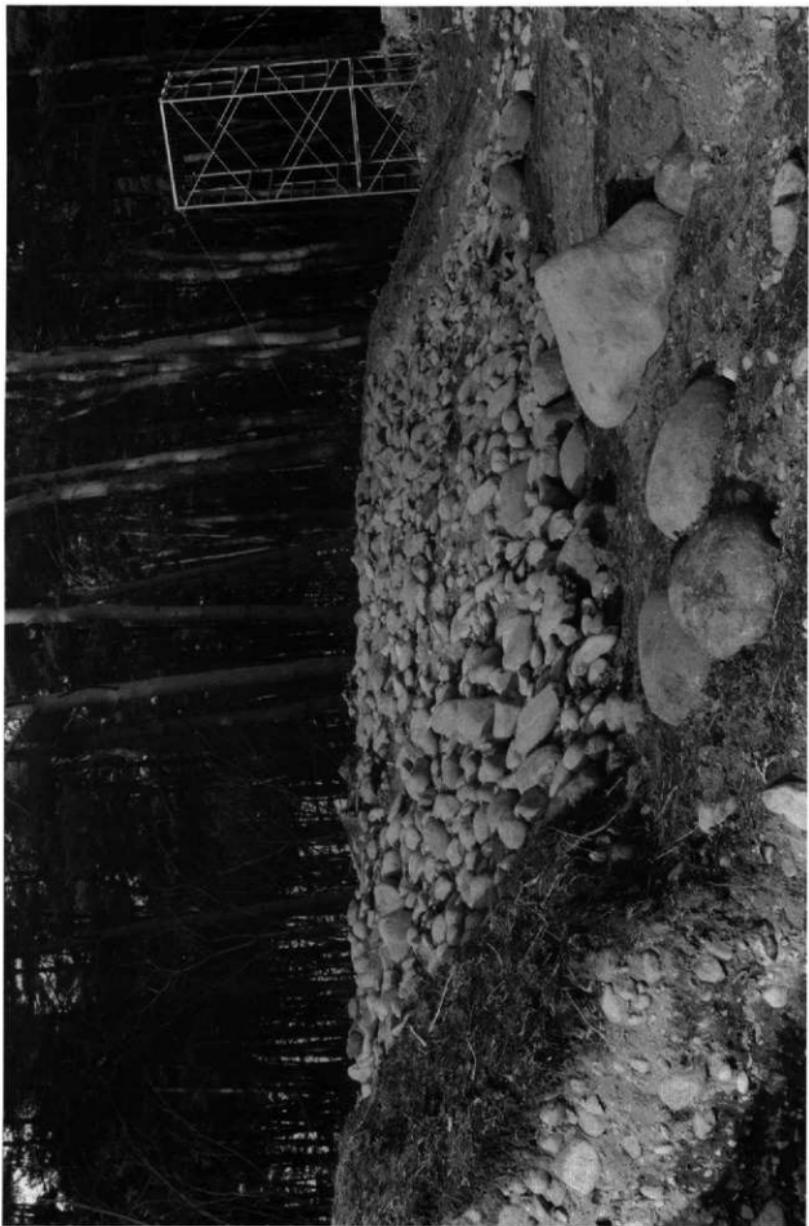
▲H トレンチ土層断面（西から）



▲B トレンチ北側拡張区（東から）



▲H トレンチ北側拡張区（北から）



▲ H トレンチ北側拡張区（南東から）



▲H トレンチ北側拡張区（北から）

図版八



▲ J トレンチ土層断面（東から）



▲ I トレンチ土層断面（東から）



▲A・B トレンチ調査前状況(北から)



▲I・J トレンチ調査前状況(北から)



▲I・J トレンチ調査前状況(南から)



▲現地説明会風景



▲調査風景(南から)



▲現地説明会風景



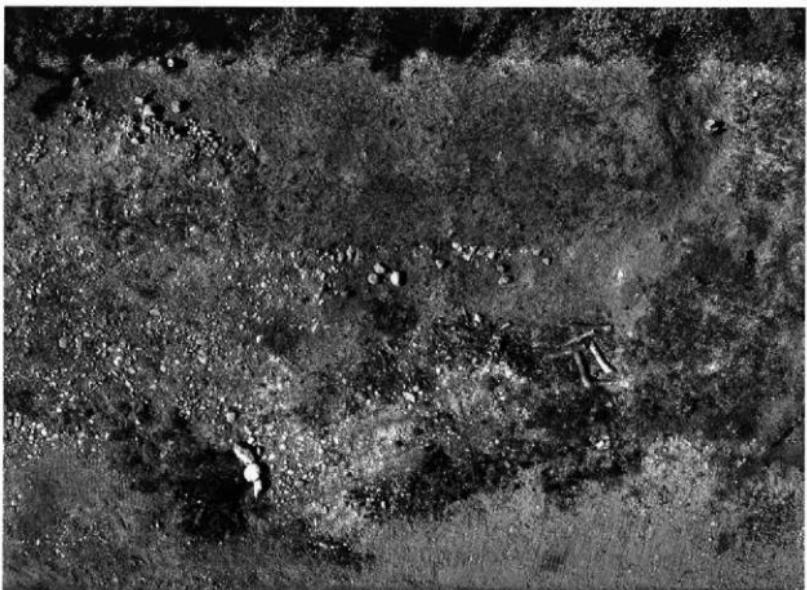
▲調査風景(北東から)



▲調査風景(北から)



▲C トレンチ付近調査前状況（上空から）



▲H トレンチ付近調査前状況（上空から）

米沢市埋蔵文化財調査報告書 第51集

直江石堤遺跡報告書

平成7年3月20日 印刷

平成7年3月31日 発行

発行 米沢市教育委員会

米沢市金池三丁目1-55

TEL(0238)22-5111 内線7504

印刷 青葉堂印刷

米沢市下花沢三丁目8-50

TEL(0238)21-2366